

1. 蔵王神社は、何故わかりにくいのか
2. 歴史の概観
3. 岩野蔵王堂の400年、その後の保元の乱
4. 三尺坊とは、どんな人
5. 寺泊矢田 での様子の想像
6. 蔵王大権現と別当安禅寺、神田の安善寺も
7. 明治の廃仏毀釈と蔵王神社 (現金峰神社)、新・安禅寺
8. 又倉神社ほか、合祀の神社祭礼・神事について

蔵王神社をガイド説明する場合、何を魅力として、ガイドするか。栃尾・長岡蔵王の間に、短いながらも寺泊矢田の仮寓という謎の多い変化もあって履歴がはっきりしないところがあり、それに加えて上杉謙信、堀直奇・妙徳院と徳川幕府という時の権力者・後見者による変質があり、直線的で単純なストーリーでお話するのは自分には難しいと感じています。

そこで蔵王ガイドや町なかガイドのとき、上記に示した蔵王権現、金峰神社の詳しい説明も重要ですが、説明は観光パンフや観光情報に任せ、代わりに以下の補足のような、長岡案内にとって捨てがたいローカルな話題を中心に据えて、ゲストの興味の有無を探りながら、切り込んでみようと思います。

補足1. 上杉謙信と長岡宮内・上条城

補足の補足 上条城の近くの撰田屋城、定明城、鷲巣城、村松城、中沢城

補足2. 妙徳院と長岡・撰田屋村

補足3. 何故、栃尾に戻らず、長岡に遷座なのか

補足4. 栃尾秋葉神社奥の院の石川雲蝶・小林源太郎の彫刻

補足5. 栃尾秋葉神社の算額

補足6. 金峯神社大祭の流鏝馬

補足7. 修験道の発生と衰退

補足8. 栃尾美術館と三十三観音、謙信廟

補足9. 馬市とあぶらげ

補足10. 参考地図 (馬の放牧地として最適な南面の斜面)

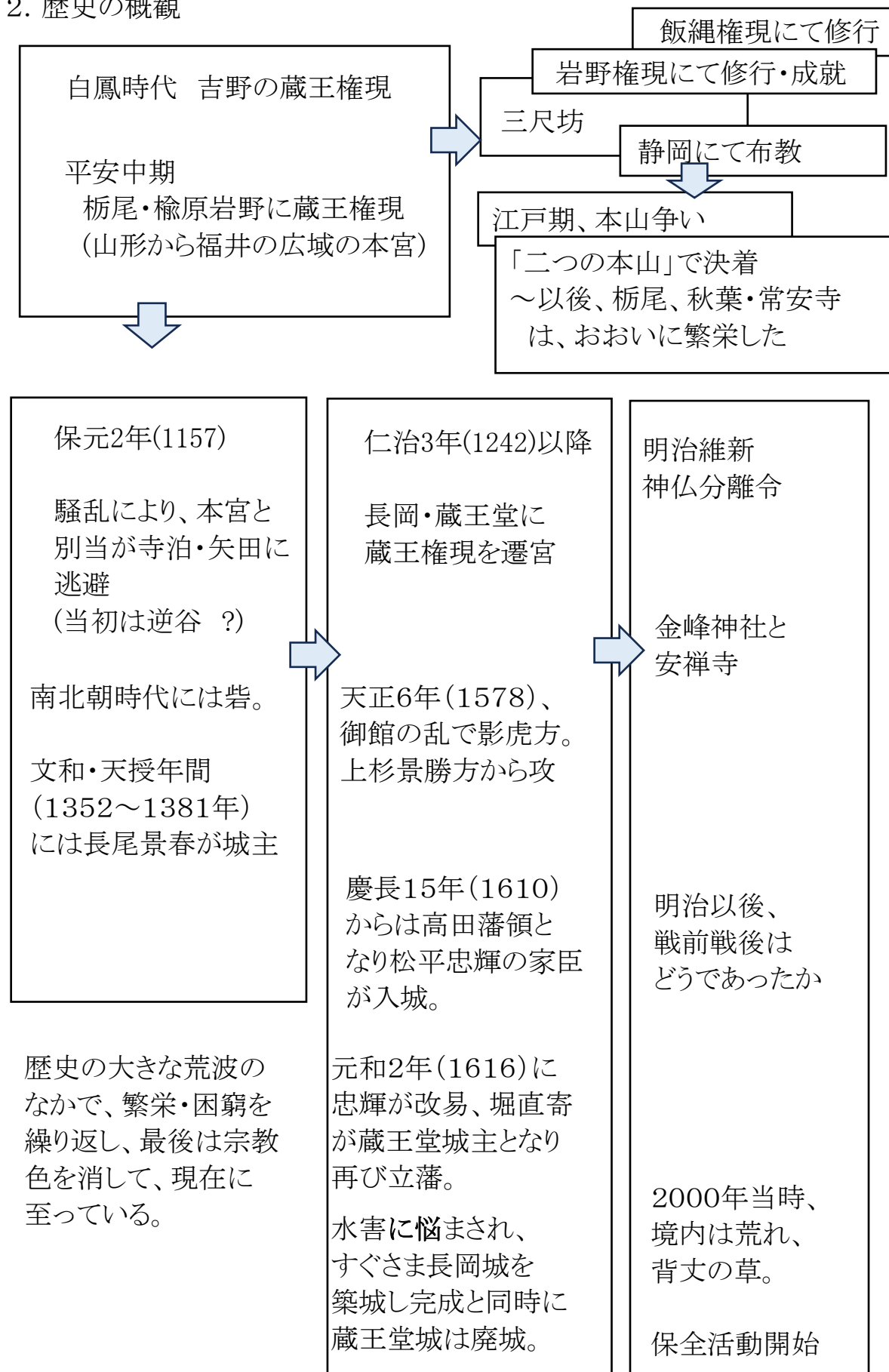
本論攷は、今までに保管していた観光資料に加えて、2023年開催の、長岡市栃尾観光ガイドクラブ主催による、栃尾産業交流センターでの講演(7/15)「栃尾 秋葉神社と長岡 蔵王様(金峯神社)の歴史に迫る」と、バス研修(9/21)「長岡・栃尾を巡る地域探訪バス学習会」に参加時に入手の資料、及び見聞を参考にしました。講師は 県文化財保護連盟理事・石田哲彌氏 ガイドは石田氏のほか、各地元の保存会の皆さん。石田さんの「火防・秋葉信仰の歴史」も、随所で引用させていただきました。

1. 蔵王神社は、何故わかりにくいのか

最初の岩野楡原の蔵王神社から現在地の長岡蔵王堂金峰神社への変遷という、メインストリームの中に、下記の外乱とも言うべき「影響」が加わり、わかりにくくなっています。ガイドでも、注意と工夫が必要です。

- ① 蔵王権現本宮の変遷 ～ 北陸随一の権現に始まり、本来は、これが主題
 栃尾蔵王権現 — 矢田蔵王権現 — 長岡蔵王権現 — 明治・廃仏毀釈
 — 現金峰神社 (宗教色の消滅、民俗文化の伝承)
- この周辺に、以下のような多くの「影響因子」があり、複雑化。
- ② 三尺坊、静岡の秋葉神社との併立
 火防秋葉信仰の開祖である秋葉三尺坊
 飯縄権現(信州戸隠での修行)～栃尾蔵王権現(修行の成就)～
 ～ 遠州秋葉山(別当秋葉寺の開基)
- ③ 寺泊矢田への遷座と変質
 それまでの歴史をご破算にする大変貌
- 新たな、栃尾の秋葉三尺坊の歴史 (上杉謙信、江戸幕府による復活劇)
- ④ 上杉謙信、栃尾秋葉神社と常安寺
 楡原に残った三尺坊の社殿「般若院」を、戦国時代、上杉謙信が
 常安寺に移転し、社殿と社領を寄進 (栃尾の秋葉三尺坊、秋葉神社)
- ⑤ 二つの三尺坊の間の徳川幕府裁判と結果、二社とも本社
 遠州秋葉三尺坊(別当秋葉寺)と 栃尾・秋葉三尺坊(別当常安寺)
 (徳川家康のご朱印を有する) 長岡蔵王権現(安禅寺)
 上野・東叡山寛永寺
 ～二大本社、栃尾の繁栄 (徳川家菩提所)
- ⑥ 堀直奇と蔵王堂城、妙徳院、蔵王神社・別当寺安禅寺の繁栄
 今も伝わる、多くの社宝
- ⑦ 廃仏毀釈と金峯神社・安禅寺の変質
 現在に至る
- ⑧ 又倉神社他、合祀の神社祭礼・神事
 王神祭儀・鮭の包丁さばき、流鏝馬

2. 歴史の概観



3. 岩野蔵王堂の400年、その後の保元の乱

(1) 岩野楡原(にればら)への勧請

越の国、福井から山形にかかる一帯の本宮としての位置づけだそうである。



写真の「岩野蔵王堂由来」には、和銅二(709)年、この地に吉野の蔵王権現を勧請。北陸随一の霊場で、十二坊、二千人を超える修行僧を抱えたという。天皇の勅命というより、吉野の蔵王権現の勢力拡大・修行地増加の方針の中で、先行する白山信仰の拠点からも距離がある越後に、勢力拡大を託したのであろう。川の流れが直角に曲がる場所も、立地の要点とのこと。

(2) 保元の乱、保元2年の岩野からの退散の理由

その前年、保元元年(1156年)7月に皇位継承問題や摂関家の内戦により、朝廷が後白河天皇方と崇徳上皇方に分かれ、双方の衝突に至った政変・保元の乱(ほうげんのらん)が起こった。崇徳上皇方が敗北。その影響らしい。

以下、「火防・秋葉信仰の歴史」p97 などからの内容を引用

蔵王権現の遁走は、後白河側源氏、崇徳側の平氏の戦に巻き込まれたのか、あるいは修験僧同士の争いか、はたまた院内の主導権争いかは不明である。だが、矢田に逃れて百年もの間、身を潜めていたことから考えると、政権闘争に加担したことによって長い間、反逆者とされていたからではなかろうか。とすれば、院内の主導権争い程度のものではなく、国の歴史に関わる、大きな政権争いに巻き込まれたものと推察される。・・・

敗走し、拠点を超後に失うことになるが、ご神体とともに情報・諜報の機能に限定した小規模で、逃げ延びたのでは、という見方がある。

遷宮の状況は、移転先の矢田に残る社地跡の狭さからみても、最小限度の祭具のみを携えてのものだったことがうかがわれる。

引用、終わり。

このように、北陸、福井から山形に至る高志の一带の本宮、二千人を超える修行僧が四散やむなしの変事であった。最終的に、寺泊矢田に仮寓することになるが、その理由は明らかではない。大勢の修行僧を抱え直す暇もなく、ひたすら逃走した結果であろう、「矢田に行きついた」ということしか、記録がない。矢田でも、当時の実態は記録になく、ただ「蔵王権現は、うちの神社の片隅に収まり、およそ100年の後に長岡に移っても、ご神体は、しばし当地にとどまった」という言い伝えがあるのみである、

(3) 三島逆谷から寺泊矢田という説について

途中遷座の「うわさ」の三島の逆谷にも、川の流れが直角に曲がる場所があることから、寛益寺を頼っての敗走とも考えられる。

別当寺に付き合いがあったかも知れない。そこも危うく更に奥に逃げ、寺泊矢田にて、無理に頼み遷座したならば、本尊掛け軸の

管理権を神明神社を預かる村人に取られた状況も、頷ける。



長岡に遷座後に勢力を増した後に、ようやく掛け軸を返してもらったのである。矢田は、5章の「寺泊矢田」に示すが、まことに狭いところであり、岩野蔵王堂の引っ越し先とは、どうい思えない。

如何に、疲労困憊していたか。捨て得るものは全て捨て去り、ごく少数で逃走する、蔵王権現の衰退、ここに極まれり、という状態であったと思われる。いろいろな研究がされているが、要は、そういう状態であった。

だからこそ、数十年後に長岡に新世界を求めたときにも、ご神体を手元にする事なく、(質のように、矢田の衆に取られたままの、)みじめな状態であったことも、理解できる。

4. 三尺坊とは、どんな人

信州戸隠が開かれる前の飯縄権現で修業後、さらに栃尾で修行を重ね、成就して、静岡に転進して火防秋葉信仰を広めたという。なぜ、転進先が遠州静岡なのか、は明らかではないようであるが、石田氏の著書「火防 秋葉信仰の歴史」(新潟日報事業社 2916)のp146で示されている内容が、その理由なのかも知れない。少し長くなるが抜粋する。

長野県の諏訪湖に源を発する天竜川水系に沿って、修験回峰の霊山が連なる。そのメッカが秋葉山である。修験回峰の峰々は信州や東海各地につながることから、各地からさまざまな修験(山伏)が集まる特異な修行道場であった。熊野山は熊野修験の聖地であり、熊野修験(先達)が能野三山を根拠地として活動し、また金峰山は吉野修験が行場として修行に励む。このように霊山には、その山々を根拠として特定の修験(山伏)が寵もって修行をなしているが、秋葉山は行基菩薩が開山したお山といわれ、その後の歴史の展開から想像するに、熊野修験、白山修験、秋葉修験の三修験が共存していたとみられる。

まず天竜川流域に連立する霊山の修験回峰行のルートは、修験の開拓者の熊野修験によって開かれていったものと思われる。そこに北陸からの白山修験が南下し、この修験回峰ルートを修行道場としたのであろう。そしてさらに秋葉三尺坊が出現した。越後から飛来したもので、同山を拠点として新たな修験道を展開した。こうして三者は、秋葉山を舞台にそれぞれが独自の信仰を展開しながらも、共存して秋葉山の運営に当たったと考えられる。いわば秋葉山は、修験道の総合大学的存在となっていたものと思われる。

そうした中で、際立って一山を席卷していったのが秋葉三尺坊を開祖とし、火難の守護を本願とした秋葉信仰であった。秋葉信仰の本尊仏は開祖の秋葉三尺坊であるが、三尺坊は終生、飯縄権現を信仰していたので、根本は飯縄信仰であった。よって三尺坊の尊像も飯縄権現と同じ像容である。そして、やがて秋葉山といえば「火伏信仰の霊山」として全国津々浦々にまで、その名前を轟かせたのである。一般に飯縄修験や飯縄信仰については、「飯縄使い」といった妖術的なところがあり、その修行の内容ははっきりしない。しかし、秋葉信仰に限っては同じ飯縄信仰でも「火防や戦争の守護神」という、わかりやすい宗教だっただけに、武士や農民、庶民に広く信仰され、民間信仰の代表格となつたのである。(引用、以上)

なるほど、三尺坊の遠州転進は、そのようなことが背景かも知れない。

そして江戸期になり、栃尾と静岡の本家騒動が持ち上がった。

そして幕府の裁定により、栃尾は三尺坊行法成就の地で「古来の根源」、静岡は布教弘風の地で「今の根元」で、如何れも本山となり、栃尾も多くの信者民衆を集めたのである。田上善夫「地方における霊山の配置とその影響」、富山大紀要2008も興味深い内容でした。

5. 寺泊矢田 での様子の想像



蔵王堂跡

矢田の神明神社に、保元2年(1158)に遷宮。左上写真は、竹林の中にある拝殿・中の院、奥の院。この神明神社の氏子に本尊、掛け軸の管理を委ねたらしい。

現在長岡市の蔵王堂城跡にある金峰神社はもと蔵王といひ、安禪寺は同時に開創し附随した修験道場であったといふ。この蔵王堂がもと矢田にあり仁治三年に長岡の又倉と呼ばれた地に移り、村の名を蔵王権現の名にちなんで蔵王村というようになったといふ。現在の長岡市蔵王町である。

戦乱のつづいた南北朝時代には、僧兵たちが城を築いてこの神社をまもり、上杉氏の守護代であった長尾氏が本格的な城を築いて、長尾景春が初代城主となった。

この蔵王堂が矢田へ移る前は、枳尾の楡原にあったといふ。楡原から矢田へ移られたのは永暦元年約八十年間矢田に鎮座されたことになる。

地域を良く知ろう云

そこから察するに、当地では辛い立場だったと思われる。100年弱、当地にとどまったが、勢力は拡大できなかったのではないか。寺泊の白山信仰の存在も、その理由のひとつと考えたい。矢田の小高い丘の上の神明神社の祭神は大日靈貴尊で、矢田の産土神とされる。長岡に遷座しても数十年は、蔵王の祭神は、人質のように矢田に留め置かれ、祭礼の時に、神官が矢田の神社に拝借に来たとのことである。

祭神のうち、蔵王社は初め古志郡楡原で祭られ、後に遷座して長岡市西藏王の金峯神社として祭られているといわれているから、仮寓の連続みたいである。神明神社側としては、西藏王の金峯神社は「分祀」という扱いなのかも知れません。(春日 私見)

時代は下り、それに加えて、明治四十四年(1911)、字京田の蔵王社(金山彦命)と字家中の諏訪社(建御名方命)を合併し、社号を旧来のまま、現在の神明神社になったとのことである。

6. 蔵王大権現と別当安禅寺、神田の安善寺も

かつての蔵王権現は明治維新の神仏分離令によって廃寺となり、替わって現金峰神社が建立された(祭神 金山彦命)。従って、蔵王大権現の管理は、蔵王権現を管掌してきた安禅寺である。

[その歴史]

仁治3年(1242)、寺泊町矢田より信濃川河畔の港、又倉に遷宮。又倉は川の合流点、デルタ地帯で、道祖神、又倉様が祭られた。栃尾小貫の羽黒神社境内の正倉や泉の正倉と同様である。

蔵王権現は栃尾勸に請以来、格式が高いことからたちまち北陸の霊場となり、多くの参詣者が訪れ、「蔵王堂」として発展。境内地には32の坊(塔頭)が存在。

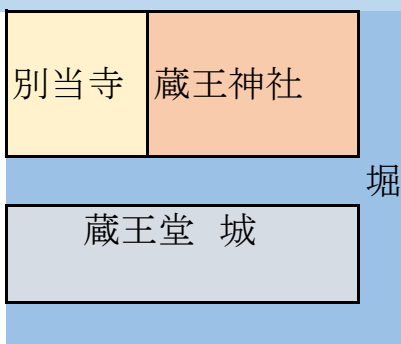
地名も蔵王堂となり門前町として繁栄を極めた。その物流の拠点に蔵王堂城が築城され、代々長尾氏が支配した。さらに栖吉に山城、栖吉城が築城され、栃尾城と関係を深めた。戦国時代、長尾景虎が中郡の郡司として栃尾に下向することにより、防備体制を一新。栖吉城主、長尾房景の時代、栖吉城・普濟寺と蔵王堂城・蔵王権現別当安禅寺との関係を密にするために、神田に安善寺を建立。長翁存宗禅師が安禅寺との関係をつなげた。上杉謙信は蔵王権現を崇敬、天台宗から真言宗に改宗。江戸時代初期、天海僧正によって、また天台に戻され、上野寛永寺の直末となり、権勢をふるった。「秋葉裁判」は権勢と常安寺との連携により勝ち抜いて本山となった。

蔵王堂城は、現在は、小高い土塁が残って、堀が囲み、その堀は100メートルほど離れた信濃川に続いている。そのお城が、蔵王権現、別当寺安禅寺に隣接して築城されたことがわかる。

江戸期の蔵王権現は
2~3,000人の修行僧。

鉄を作っていた痕跡もあり、
製鉄が稼ぎ頭か。
鉄の原料の砂鉄などは、
どこから調達したか。

信濃川



7. 明治の廃仏毀釈と蔵王神社 (現金峰神社)、新・安禅寺

明治維新による別当安禅寺の廃寺と、明治18年の安禅寺復興

安政2年(1857)8月、江戸浅草の浅草寺別当の亮貫が、初めて安禅寺別当として着任し、幕末維新の激動期に献身的な活躍をした。慶應4年(1868)5月北越戊辰戦中に安禅寺の一部は西軍(新政府軍)に焼かれた。これに先立つ同年3月、新政府は神仏判然令を発し、神名に権現などの仏号を用いる事を禁じ、神社に仕える社僧や別当の還俗(僧籍離脱)を命じた。亮貫は脇野町民政局や水原の越後府本庁へ、蔵王権現は元来大和吉野山の金峰神社を招いた神社であると申し立てるなど、諸方面に陳情し奔走した。

その結果、明治4年2月に蔵王権現は、柏崎県によって神祇と確定され、翌年(1872年)4月には金峯神社の社号が与えられた。

亮貫は還俗して同神社の神職となり、三芳野千春(ちはる)と改名した。蔵王権現社は廃絶の危機を脱したが別当安禅寺は廃された。

神社の公認にあきたりない三芳野千春は明治15年7月、神官の職を辞し、再び髪を落として比叡山に登って修業し、法号を千春(せんしゅん)と称し、翌年3月には蔵王に帰り、信徒と共に安禅寺復興運動を始めた。復興の願書を新潟県令や中央の内務卿に再三提出し、ついに明治18年12月、県令から、翌年1月には内務省から寺院復興と安禅寺の寺号を許された。千春の尽力によって安禅寺は天台宗の寺院として復興され、寺に伝わる諸仏や多くの貴重な古文書類も散逸を免れた。こうして千春は安禅寺中興の開基と仰がれ、住民の尊敬を集めることとなった。

しかし近年は、境内は荒れはて、保存会の方々の話によると、2000年頃は背丈を超えるような草ぼうぼうで、保存会の頑張りで、ようやく現在のようになったとのことである。(2023年9月)

金峯神社の御祭神は、金山彦命(かなやまひこのみこと)。

古来より鉾山守護の神として崇められ、製鉄、鍛冶の他、金運・縁結びの神徳があると崇敬されている。

8. 又倉神社ほか、合祀の神社祭礼・神事

仁治三年(1242年)この蔵王(当時は又倉村)の地に遷座したが、その折又倉村の産土神又倉神社と合祀し、蔵王権現の信仰が盛んになるにつれ、又倉神社は蔵王権現の境内社と位置づけられ、又倉村の地名も蔵王村へと変わっていった。又倉神社は延喜式内社「宇奈具志神社」の論社とされ、信濃川沿いの州浜地に現在も幾社か鎮座する。この地ではその御神威をもって「王神様」と称えており、未開の地であったこの地に農業・漁業・酒造などの技を伝え長岡の里を興されたという。

戊辰戦争の混乱の後、金銭的制度的に王神祭を執行することが困難になり、明治時代の中頃より流鏝馬など祭儀の一部のみを執行するようになった。

王神祭儀のいつくか

斎場の奥に御神体を安置し、御神体のすぐ前中央に麻笥(おけ)が一つ、背腸麻笥といい中に鮭の背腸を奉る。古来より越後国の朝貢物として古記に記載されるミナワタである。塩漬けして強壯薬として重宝された。次に年魚行事を執行う。神前中央に奉った鮭を宮司が魚に手を触れることなく、二本の鉄箸と包丁で三枚におろし鳥居の形に整える。これを思念切り(おんねんぎり)という。

現在行われている王神祭は神社を取り巻く様々な環境の変化により縮小を余儀なくされ今に至るが、それでも古代の文化や生活が祭儀に遺されており、その特殊性をもって新潟県無形文化財に指定されている。

金峯神社の御祭神は、金山彦命(かなやまひこのみこと)をご正殿にお祀り。古来より鉾山守護の神として崇められる。製鉄、鍛冶の他、金運・縁結びのご神徳があると崇敬されている。実際に境内から鉄鋼スラグが発見されており、製鉄がなされたことがわかる。時代と規模は不明。

また相殿にはお祀りしている神様は、

○又倉神社・・・大地主命(おおとこぬしのみこと)、須勢理比売命(すせりひめのみこと)・沼奈川比売命(ぬながわひめのみこと)。

この長岡の地に信濃川の恵みの漁業や稲作、酒造りをこのちに広めたとされ、稲作・諸業繁栄・縁結び・良縁のご利益があるとされている。

○長岡総社・・・長岡の各町に鎮座される産土神社合祀霊をお祀り。

その他に、以下をお祀りしている。

○稲荷神社・・・宇迦之御魂命(うかのみたまのみこと)

○秋葉神社・・・火之迦魂命(ほのかぐつちのみこと)

○日枝神社・・・大山咋命(おおやまつみのみこと)

○八幡神社・・・誉田別命(ほんだわけのみこと)

補足1. 上杉謙信と長岡宮内・上条城

謙信は、栃尾城から長岡宮内・上条城に移ったとき、長尾から上杉に養子として迎えられた。上条城の位置は、現在の原信・宮内店の東にあたり、栖吉城、村松城が見え、さらに栃尾城も榎峠に中継の出城を持てば、連絡を持てる位置になる。西山方面、小千谷方面も眺望が拓け、金倉山を抑えると魚沼全域にも連絡を持てる。その意味で、宮内・上条城は、重要拠点と云える。個人の勝手な推察であるが、北の三条城、栃尾城、そして南の魚沼・坂戸城が三条長尾、古志長尾、上田長尾の各一族の居城であり、栃尾城が栖吉城、上条城の主要な館、下表にまとめた近隣の出城とともに、中越・古志の地を支配していたのではないのでしょうか。

補足の補足 上条城の近くの摂田屋城、定明城、鷺巣城、村松城、中沢城

| | |
|------|---|
| 摂田屋城 | 太田川の右岸、吉乃川の上組蔵の真南あたりにあったらしい。川上四郎の生家も、このあたり。 |
| 定明城 | 尼寺の定明寺と八幡神社の間のあたりにあった。吉澤仁太郎の生家も、城の近くとされる。 |
| 鷺巣城 | 鷺巣町の曹洞宗寺院の定正院の境内にあったとされる。山上に建ち、周りは参道階段や崖に囲まれた要害である。 |
| 村松城 | 長岡市村松町の古刹円融寺の奥山にあったという。ここと金倉山頂上を結べば、魚沼・坂戸城の上田衆との連絡も可能であったであろう。上条城を含め、これらは、城というより大きな館が、主要な城としての栃尾城、栖吉城、坂戸城との連携出城のようなものだったと思われます。 |
| 中沢城 | 中沢町の奥、真宗大谷派寺院の専行寺の左から、中央総合病院が見える方角に少し行ったところ。 |

補足2. 妙徳院と長岡・摂田屋村

妙徳院は上杉謙信育ての親。軍師、本庄実乃の孫。そして後水尾天皇の妃、東福門院和子の母親、第109代 明正天皇(女帝)の祖母である。徳川幕府の公武合体に貢献し、徳川300年安泰の基礎を作った。絶世の美女と謳われる。戒名は「勅特賜妙徳院殿廣次上人青木軒是山道般庵主」。

さらに妙徳院が隠居して、長岡の蔵王堂に隠棲することにより、天海僧正との関係から貴重な宝物が遺された。なお妙徳院に下された摂田屋などの寺領は全て別当寺安禅寺所領となった。

安禅寺は寺領として幕府から与えられた朱印地300石を持ち、領域は蔵王、寺宝、摂対屋、堀金、雨池、中島の6か村に及んだ。また、同寺には仏事を務める寺中3か寺と社役を務める社家3人が所属していた。

さらに堀直奇が秀忠に推挙した妙徳院も、隠居後に蔵王堂で暮らすように

なったが、功勞により幕府より年900石を得ていた。妙徳院は、そのうち200石を信州戸隠に、130石を摂田屋に寄進したという。

大名の石高は領主と領民の取り分の合計であり、税率四公六民として一万石大名の取り分は、公称1万石=10億円のうち4億円である。7万4千石の長岡藩の取り分は、2.96万石 = 約12億円。藩の2.96万石に対する、妙徳院の900石は、3%。摂田屋の130石は0.44%にあたる。この大金が、亡くなった後も江戸期の全期間を通じて、どのように摂田屋(安禅寺領だから接待屋)村の財政に寄与したか、知りたいものである。

尚、妙徳院については、先年亡くなられた、当時河井継之助記念館館長の稲川明雄さんが、作者自身の言葉にあるように長岡誕生期をフィクションで描いた「長岡築城物語」(長岡新聞社2014)のなかで、多くの頁を割いておられる。妙徳院と、秀忠との間に生まれたという娘和子(まさこ)の二人の女性を縦糸に、蔵王神社、昌福寺、千手千蔵院の三寺を横糸に、堀直寄(直寄)一族の長岡築城のストーリーにまとめたともいえる、不思議な小説である。

そのなかで、妙徳院が蔵王に住むようになると、蔵王神社の影の祭主となって、あちこちに寄進をするようになり、神社の祭りの性格も変わっていったと述べている。さらに寛永寺の管轄地として蔵王村のほか、寺宝、堀金、摂田屋など、蔵王権現社を維持するための領地が、定かではないが三千石とも述べている。900石の三倍近い、大変な財力である。

補足3. 何故、栃尾に戻らず、長岡に遷座なのか

誰も言及していないようですが、以下に疑問点をいくつか。

疑問1. 修験者の修行に用いる山が周囲にないのに。

疑問2. 十二坊など、多くの堂宇を建造する土地が少ないのに。

疑問3. 遷座の仁治3年(1242)ころ、長岡は、どんな状態か。

南北朝時代には砦のようなものがあったらしい。「長岡の歴史」には、永仁元年(1293年)、時宗の他阿真教が蔵王堂で人々を教化、とある。

(<http://najirane.com/nagaoka/history.htm>)

数千人といわれる僧をまかなうに、江戸期には製鉄による財力を期待できたらうが、鎌倉時代は、このあたりは、まだ湿原だったと思う。

鎌倉時代に、既に製鉄に適した土地だったのだろうか。

鉄の原料の砂鉄、火力の木材、釜や炉をつくる石などの調達に、適していたのだろうか。

補足4. 栃尾秋葉神社奥の院の石川雲蝶・小林源太郎の彫刻

秋葉神社奥の院 烏天狗の彫刻の意味

奥の院の彫刻は、土台から破風にいたるまでくまなく檜の板に力強い彫刻で埋めつくされています。

その特徴は、総檜造りの社殿に中国の吉祥霊獣で隈なく飾り、木地彫り、透かし彫り、籠彫りの彫り技で構成されているところです。

雲蝶と小林(熊谷)源太郎の2人により、安政年間(1854~1859年)に8年もの歳月を掛けて彫られたものです。(雲蝶40歳頃・源太郎55歳頃の作品)「三尺坊」とは“大天狗”のことだそうで、これにちなみ“烏天狗”を彫ったと言われています。

腰長押(こしなげし)と内法長押(うちのりなげし)との間、ケヤキの各一枚に、東面の「烏天狗の酒宴」、南面の「大天狗の前での牛若丸と烏天狗との試合」、西面の「烏天狗の敗北」が石川雲蝶によるもの。

烏天狗(からすてんぐ)は、大天狗と同じく山伏装束で、烏のような嘴を持った顔をしており、自在に飛翔することが可能だとされる伝説上の生物。

剣術に秀で、鞍馬山の烏天狗は幼少の牛若丸に剣を教えたともいわれ、このような故事により、烏天狗と牛若丸の闘う場面にしたと思われま

す。しかしながら、この作品は未完成と云われています。

途中で予算不足となり、雲蝶と源太郎は止む無く枳尾を去ったというが、自分としては、しっくりこない。 なにか特別な理由があるように感じます。

補足5. 枳尾秋葉神社の算額

秋葉神社に掲げられている算額は明治26年(1893)に奉納されたもので、長岡出身の数学者、諏佐嘉右衛門嘉継とその弟子によって出題された。問題は全部で3問で当時の高等な数数学を伝える貴重なものとされる。昭和48年(1973)、長岡市指定有形民俗文化財に指定。

補足6. 金峯神社大祭の流鏝馬

馬を駆せながら的を射る競技を「流鏝馬」と言います。

金峯神社の大祭に流鏝馬が行われるようになったのは、いつの時代か定かではないが、源義家が奥州討伐の勅命をうけて北国街道下降に際し、朝敵降伏を祈願して社前に奉納したと伝えられているようです。

流鏝馬は新潟県では、多く残って佐渡を除くと、長岡の金峯神社のみらしいが、何故でしょう。

王神祭儀の、鮭を二本の鉄箸と包丁で三枚におろし鳥居の形に整える「思念切り(おんねんぎり)」といい、金峰神社には、珍しい神事・祭事が残っている。ごった煮のような神社行事ですが、これらを統一するようなストーリーができれば、おもしろくなるのにな、と思います。

補足7. 修験道の発生と衰退

2023栃尾講座の講師の石田哲彌氏の著書、「火防 秋葉信仰の歴史」(新潟日報事業社 2016) p255～に、日本の仏教史における大きなできごととして、修験道の歴史も簡潔に述べておられる。少し長いが引用する。(章 番号は省略)

○ 日本の仏教史における大きなできごと

- ①古代の仏教伝来と神仏混淆
- ②江戸時代に施行された寺檀制度(寺請制度)による事実上の仏教国教化
- ③明治維新の神仏分離とそれによって起こった廃仏棄釈

○ 信仰の変革とその背景

日本の宗教は、自然あるいは天に大きな霊力と畏敬の念を抱き、それが信仰となり(古代神道)、多くの神々を崇めてきた。ところが六世紀半ばに海外から仏教が入ってきた。仏教が携えてきたものは、そうした素朴な信仰、神々の及びもつかない、高度な教理を持ち、底知れぬ文化を持った強力な宗教であった。

まず、仏教には教典に説かれた高等な宗教理論と仏像の彫刻に見られる工芸、寺社に見られる建築や医薬に関する知識など、どれ一つとっても目を見張るような進んだ科学知識がちりばめられた新しい文化であった。しかも信仰の根本である信仰の対象は、あくまでも人間の姿(仏像)で対応し、さまざまな功德と効験を持っていた。

このようなことから、仏教の優位は決定的であった。そこで、時の政府、朝廷は「仏教と神祇体制を並行して展開していく」という手法を取った。

①の「神仏混淆」の端緒はこうした、お家の事情から始まった。そして、自然を崇拝する古代神道と、同じく自然崇拝の仏教、とりわけ真言密教とが結びついて、山岳信仰(修験道)が、庶民の中に深く浸透していった。

近世になると徳川幕府は「寺檀制度(寺請制度)」を施行、「先祖崇拝と法事、葬式の敢行」を推し進めた。山岳信仰も霊山詣でや御祈祷などの、庶民信仰として定着していった。

○ 神道国教を目指した明治政府

ところが、明治維新において新政府は「神仏分離令」を出し、祭政一致の神道国教を目指した。つまり、これまでの寺院の神社支配や神仏混淆の風習を廃し、神道復興に力を入れたのである。具体的には、

- ①権現・午頭天王の廃止

- ② 仏像をご神体とし、あるいは本地とすることの禁止
- ③ 神仏混淆の禁止。神社から仏像・仏具を排除する
- ④ 修験宗禁止

などの禁止令を矢継ぎ早に出したのである。そして、これに抵抗する行為を「曲事」とした。

結果、廃寺となる寺院が続出したが、特に大きな被害をうけたのが山岳信仰の修験道であった。

山岳信仰は神道と仏教の両面を併せ持っていたからである。神仏分離令はまさに、そうした混淆した信仰を一本化しようとしたのであった。結果、修験（山伏）は神社の神主になるか、寺院住職になるかの選択を迫られたのである。いうならば、これまで庶民に絶大なる影響を及ぼしてきた山岳信仰の廃絶ともいふべき大事件であった。

この布告に多数の寺社は服従し、これまで寺院が管掌してきた神社から本尊仏や仏具を寺院に引き揚げ、併せて境内地も返却した。そして、修験が祭祀してきた山岳信仰、羽黒大権現などの権現社は権現の呼称を抹消し、新しい神を祭神とする神社、例えば羽黒神社となり、新しい祭神が祀られた。

～ 引用 終了

修験道の消滅、神仏分離令、廃仏毀釈、ずいぶんと無理ができたものである。明治維新、新国家建設のもとだから実現できたのであろう。また、これがあつたから旧来の仏教も、現代化でき、今に続く宗教として残れたのかも知れない。

軍事国家のもと、ここで作られたことであり、功罪ともに大きすぎる。まだまだ、歴史の評価は終わっていないが、日本の植民地化、分裂が避けられたことは、何物にも代えがたい、大きな功績である。

自分にとって身近、あるいは知ってる神社とこの金峰神社、そして栃尾の秋葉神社は、これらと異なる雰囲気である。敢えて近さでいえば、八海山尊神社あたりなのかも知れない。

何か異なる。これは、以下のような、寺院に対する感覚に似ています。自分の家の檀那寺や、観光などでお参りする寺院とは異なる、真言宗などの「加持祈祷」の匂いのする寺院と同じ感覚のようです。

個人的な感覚なのでしょうが、自然体の宗教心と異なるものを感じます。政治に翻弄されながら、自然物への畏敬を持ち続けた、ということに対する生々しさ、というのでしょうか、修験がもつ雰囲気なのでしょう。これが蔵王様の説明のしづらさなのかも知れません。

補足8. 栃尾美術館と三十三観音、謙信廟

美術館の前の庭の片隅にあります西国三十三所観音ですが、はじめて美術館を訪問したときは、たくさんのお地蔵さんが、いいところに並んでいるな、という印象しかありませんでした。今回、これらが三十三観音であり、もともとは美術館の坂の下の常安寺から現在の栃尾美術館の高台まで、長いつづら折りの山道沿いに並んでいたと、初めて知りました。美術館の建設にあたって、「七曲」と呼ばれる丘の山頂を切り盛りして土地が造成され、元々あった三十三体の石仏群が、美術館近くに集められた、ということです。

美術館の裏にある謙信廟も、ここに門察和尚の碑とともに移動したそうですが、謙信廟の背景に、栃尾城と栃尾の町が見えるということで、まさに絶好の安住の地という感じがしました。

天文20年(1551年)、上杉謙信が常安寺の守護神として秋葉三尺坊大権現を勧請し、別当般若院の寺領を開基の験として寄進した。常安寺住職門察和尚に対し、「先年の不慮の戦争の折には大変忠信をつくしされたとして、開基のしるしとして般若院並びに法用寺分を寄進する」という寺院宛行状を与えた。その、謙信を支援したという門察和尚の石碑が、常安寺の脇の秋葉公園に、僧形の謙信像と並んでいます。「僧形の謙信像と門察和尚の説明碑」同様、本当に大切にされているんだなとも、実感しました。

それにしても、栃尾側は謙信を讃え、旧長岡旧市街地側は殆ど無視です。高田側に対しても、かの地の出身者の皆さんの謙信愛の強さは有名であり、旧長岡旧市内側との違いを感じました。謙信ほか、上杉・長尾一族の長年の争いと会津移封で、いくつもの大寺院を焼かれた上に、さんざん痛めつけられてきた中越・長岡の気持ちとの相違なんだろうな、と感じます。

補足9. 馬市とあぶらげ

なんで栃尾に馬市が盛んだったか、について、放牧に適した、牧草が茂る坂のある土地があったからだという。

その場所は、城のあった山から南に下って現在の栃尾大野町方面に至る、(わずか500mたらずの) 勾配のある土地だそうで、そして江戸の中期頃、越後の三大馬市に数えられる馬市が開かれるようになった。

なんで栃尾にあぶらげ、については、秋葉神社参詣客への土産など、諸説あるようだが、馬市にからめた説が有力らしい。

すなわち、盛んになった馬市で、お百姓さんと商人の間で商売が成立し、酒を酌み交わすようになったが、その際の酒の肴として考案されたというもので、「手づかみで豪快に食べられるように」ということから、あのような巨大な栃尾あぶらげの大きさになったという話。盛んであった馬市と巨大あぶらげの誕生として、納得感ある話であります。

補足10. 参考地図

栃尾産業交流センター
(おりなす)

馬の放牧地は、ここ。
貴重な南面の
ゆるやかな坂で、
地上の直径は
1Kmを超えると
思われます。



